

第2章 遺 跡

泉 拓良 宇野隆夫

本調査区は、北白川扇状地の末端に位置する北白川追分町遺跡の一部にあたる(図4)。そして、当遺跡の居住区は、調査区の東南に広がる微高地にあり、調査区東南隅が、その端にあたる。調査区の大部分は、この微高地から西北に向って低くなる斜面と低湿地からなっている。そして、この低湿地に順次、泥炭質層と砂層とが堆積していったため、多量の動・植物遺体が保存されることになったのである。

1 調査の方法

調査区には、多量の動・植物遺体が遺存することが判明していたため、その採取と記録の方法を検討した後に発掘調査を開始した。まずその概略を記す。

(1) 層位観察・地形復原用畔の設定

動・植物遺体の分析には、出土層位・出土地点・地形の記録が重要であるため、まず地形の傾斜に直交する中央畔を設定し、さらに真東西方向と真南北方向の畔を各2本、10m間隔で設定した(図8)。これらの5本の畔と四周の壁面で層位を観察し、斜面と低湿地各地点における層位の対応に混乱を生じないように注意を払った。また、これら9面の壁面で記録した層位図をもとにして、時期別の地形図を作成し、環境復原の基礎資料とした。なお、10m間隔の真東西・真南北方向の畔によって、調査区を9区に大別し、さらに一辺5mの小地区に細別して発掘を進めた(図8)。

(2) 動・植物遺体の採取地点と採取方法

調査区に遺存する動・植物遺体をすべて採取すると莫大な量となるため、まず予備採取をおこない、各層にどの程度の動・植物遺体が含まれているかを調査した。そして、その結果をもとにして、亀井節夫をはじめとする担当者全員が協議し、採取地点と採取方法を決定した。

採取地点は、地形を考慮して10地点を設定した(図8-N₁~N₁₀)。N₅・N₇~N₁₀が斜面付近、N₁~N₄・N₆がより西北の地点である。この各地点で各層ごとに、大型の種実については、約70kg(整理箱5箱)、小型の種子類については約1.5kg(1ℓ)の土塊を採取し、水洗篩別した。なお大型のものは5.0mmの篩を用い、小型のものは2.0mmと0.5mmの篩を

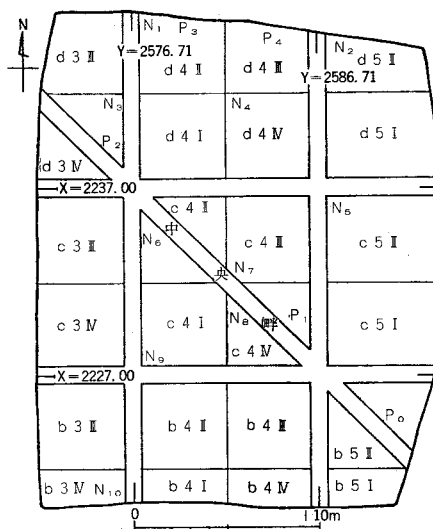


図8 地区割および動・植物遺体と花粉
試料の採取地点 縮尺 1/400

$P_2 \sim P_4$ がより西北の地点である。なお、砂層と礫層について、堆積状態の観察、粒度分析・礫種組成の調査は、必要な地点でおこない、そのつど位置と層位とを記録した。

(泉 拓良 宇野隆夫)

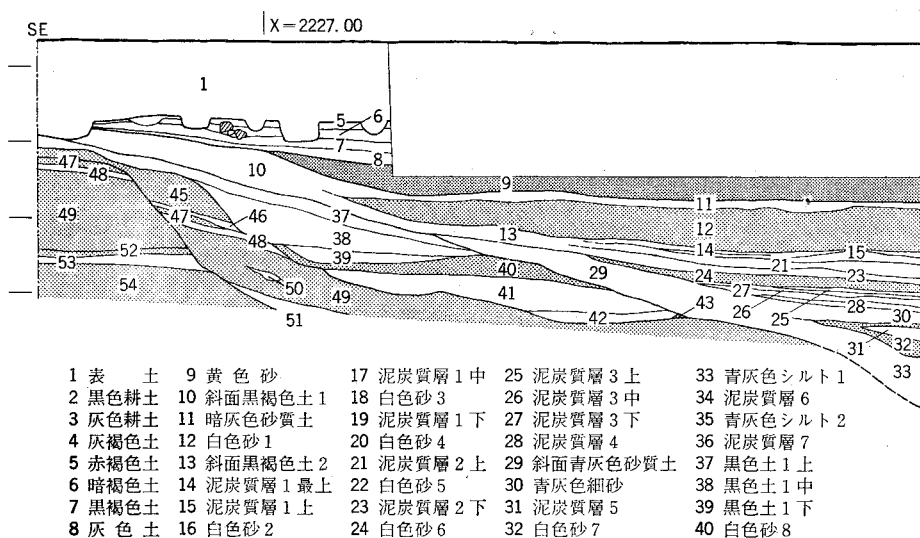


図9 中央部の

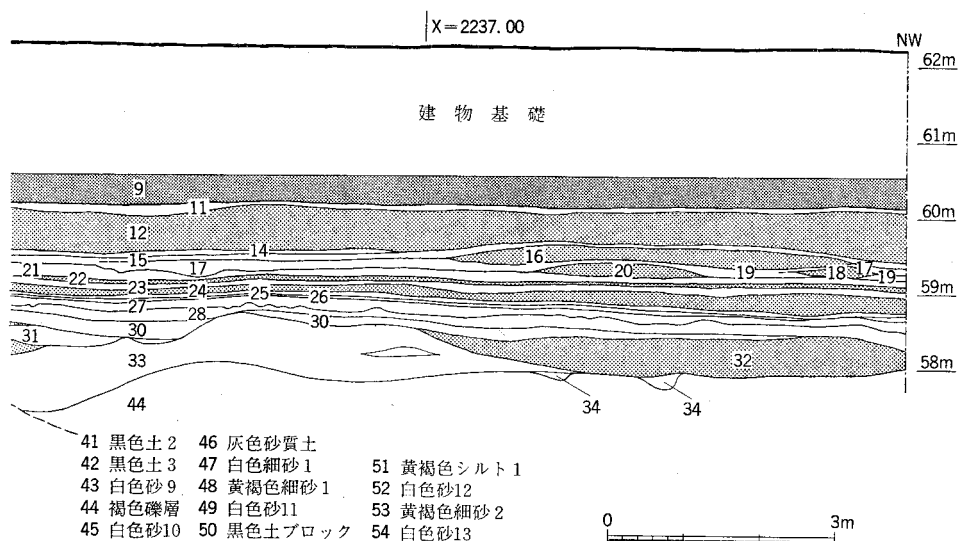
用いて篩別した。また脊椎動物遺体については、5.0 mm の篩を通った土をさらに1.0 mm の篩で水洗し、過酸化水素水で植物質を分解した資料を用いた。

より大型の立木、倒木、流木については、できる限り50分の1の実測図に出土状態を記録し、木質の資料を採取した。また倒木、流木については出土層位を記録し、立木については根の達する土層と立木を埋める土層の層位を記録した。より小型の花粉と土壌の ^{14}C 年代測定の資料については上記の10地点とは別に4地点を設定し、発掘終了後に壁面から採取した(図8- $P_1 \sim P_4$)。 P_1 が斜面付近、

2 層 位

調査区の現地表面はほぼ平坦であり、標高約62.3mを測る。縄文時代の微高地である調査区東南部では地表下約1mで地山の白砂層に達し、その間に平安時代以降の土層が7層と無遺物の土層が1層堆積する(図版6, 図10)。これらの土層は水の影響をあまり受けていない堆積であり上層群とする。それに対して縄文時代の低湿地である調査区西北部では地表下4.5mまでの間に、上層群に加えて弥生中期以前の堆積土層が36層、計44層が堆積する(図版7, 図11)。また微高地の砂礫層の断ち割りによって、上記44層より古い砂礫層を10層検出し、総計54層となる。このうち上層群を除く、48層の多くは、水の影響を受けた堆積であり、下層群とする。これらの堆積層のうち、上層については先述のとおり概要報告ですでに述べたため、ここでは下層群について示すことにする。

下層群は、堆積時期と堆積過程の違いからさらに7群に別けることができ、下の群から説明を加える。第45~54層は白川の砂層群であり、西北にむけてわずかに低くなるが、ほぼ平坦に堆積する。斜面の断層は地すべり性のものであり、地下深部につながるものではない。第44層は礫からなり、高野川系の礫と確認できた。⁽²⁾このことから、比高約3.5mの崖は、白川の扇状地を高野川系の河川が浸蝕した結果、生じたと推測できる。これら第43~54層には年代を決定する資料がないが、花粉分析によると第53層は始良火山灰の降下以



層 位 (層位番号は図10・11と一致する、北東から) 縮尺 1/100

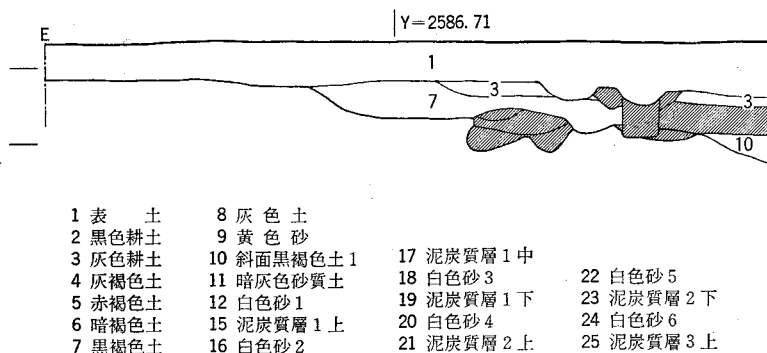


図10 南 壁 の

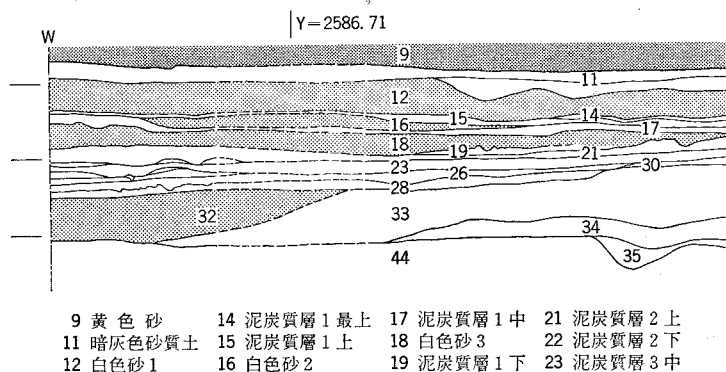
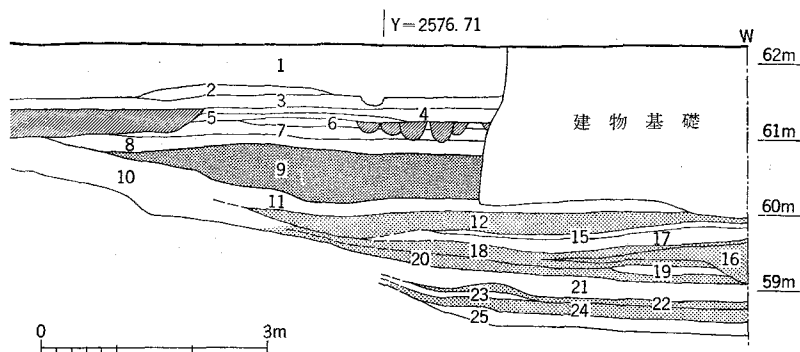
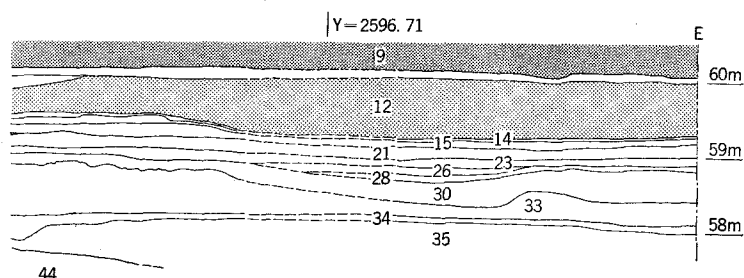


図11 北 壁 の

前の堆積であるという。崖の裾に堆積する第37～42層は微高地の白砂と微高地上の黒色土が混じった土層であり、これらの堆積によって崖は緩やかな斜面となる。これら第37～42層は、縄文中期末～後期初頭ごろのものである。第29～36層は、シルトと砂の層群であり、部分的に泥炭質土が堆積する。これらの堆積の結果、低湿地の凹凸がならされ、かなり平坦となった。第29～36層は、第37～42層の後に堆積したものであり、それらと同様の遺物が出土している。第14～28層は、泥炭質土と砂層の互層であり、低湿地がしばしば滞水域になったことを示す。この泥炭質土は調査区東北部でもっとも厚く堆積する。また、斜面の西では白砂が堆積した下面において、南から北に流れる小さな流路を検出した（第21層上面、図版3-2）。この付近も砂層が堆積する時期以外は、泥炭質土が堆積する環境であった。これら第14～28層からは縄文晩期の土器が出土した。第12層は、厚く堆積する白砂であり、3層に細別することができる。下から無層理の部分、北東から南西への流れを



層 位 (北から) 縮尺 1/100



- 28 泥炭質層 4 33 青灰色シルト 1
30 青灰色細砂 34 泥炭質層 6
32 白色砂 7 44 褐色礫層

層 位 (南から) 縮尺 1/100

示す斜層理が発達した部分、級化層理の部分である。第10・11層は、第12層上面が土壌化するとともに、下位の白砂が混じった土層であり、第11層から弥生前期末の壺が1点出土した。第9層は北部構内のほぼ全域に分布している黄砂層であり、弥生中期初頭ごろの堆積である。この層の堆積によって、低湿地はほぼ完全に埋積し、平坦な地形となった。

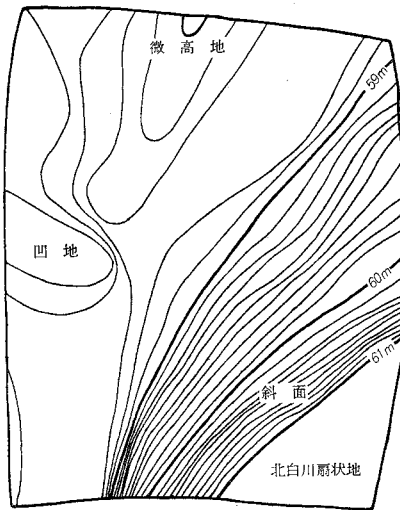
(泉 拓良 宇野隆夫)

なお各層の¹⁴C年代は、山田治と木越邦彦とによって次のように測定されている。

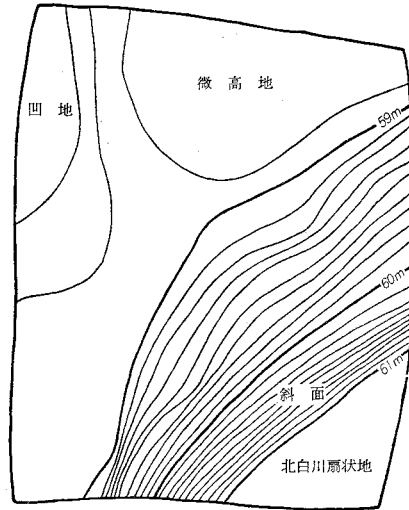
第21層	泥炭質層 2上 (木W16)	KSU-304	2000±10 B. P.	Gak-8425	2890±40 B. P.
第21層	泥炭質層 2上 (土)	KSU-286	2410±20 B. P.		
第23層	泥炭質層 2下 (木)			Gak-8246	3120±40 B. P.
第26層	泥炭質層 3中 (土)	KSU-287	2630±60 B. P.		
第28層	泥炭質層 4 (木W41)	KSU-284	2770±40 B. P.	Gak-8427	3240±40 B. P.
第28層	泥炭質層 4 (木W45)	KSU-282	2750±20 B. P.		
第28層	泥炭質層 4 (土)	KSU-288	2770±40 B. P.		
第33層	青灰色シルト 1 上面(木)	KSU-283	2770±30 B. P.		
第33層	青灰色シルト 1 (木)	KSU-299	2760±35 B. P.		

3 地 形

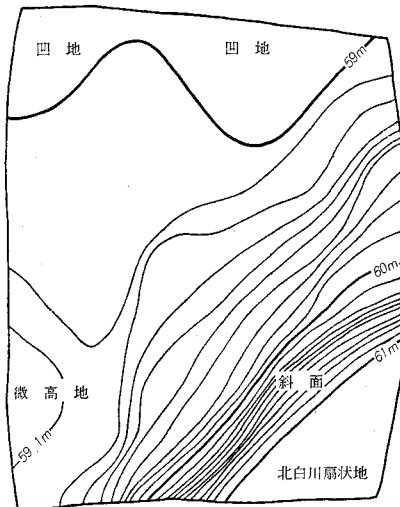
前節で中央畔の層位によって地形変遷の概略を示したが、本節では植生の理解に必要な時期を中心として、地形の変遷をややくわしく説明することにする。



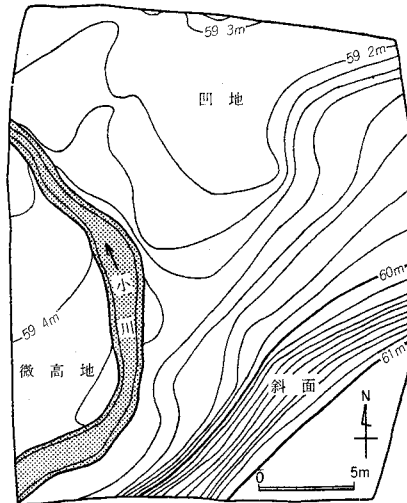
1 泥炭質層4(第28層)の上面



2 泥炭質層3上(第25層)の上面



3 泥炭質層2下(第23層)の上面



4 泥炭質層2上(第21層)の上面

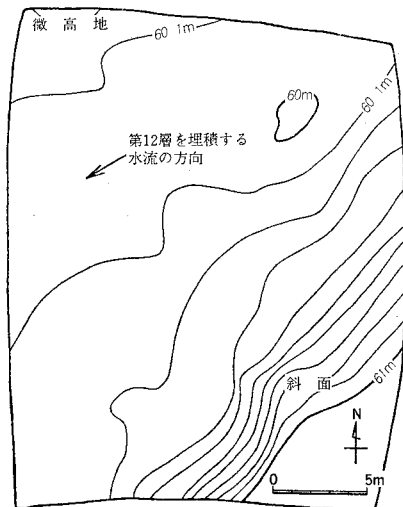
図12 地形の変遷(1) 縮尺 1/400

泥炭質層4（第28層）上面では、微高地と低湿地の比高は約2.5 mである(図12-1)。低湿地中では調査区北部に高まりがあり、トチノキ、カヤ、カエデ、ムクノキ等の材が多い。なお斜面裾の材は斜面の傾斜に沿った状態で埋積することから、この低湿地の高まりと斜面との間に、東北から西南にむけての水の流れがあった可能性がある。また調査区西部には凹地があり、ヤマグワが埋積する。

泥炭質層3上（第25層）の上面では、比高が2 m余りとなり、低湿地の高まりと斜面の間の低地がほとんど埋積する(図12-2)。低湿地は西へ深くなり、この斜面と直交して倒れたトチノキ、カエデの倒木がある。

泥炭質層2下（第23層）の上面では比高約2 mとなる(図12-3)。低湿地西部の凹地はほとんど埋積し、北へ向って緩やかに傾斜するようになった結果、倒木の方向にも変化が生じている。また調査区西南部に小さな高まりができたことは、次の時期の流路を考える上で重要である。なおこの時期には斜面下部の傾斜が緩やかになったためか、カンが倒木の状態で埋っている。

泥炭質層2上（第21層）の上面では比高約1.5 mとなる(図12-4)。低湿地北部の凹地がほとんど埋積するとともに、西南部の高まりをとり巻くように南から北へ小川が流れるようになる。そして、この時期には低湿地と斜面下部にもっとも多くの樹木が成育したが、特に小川の両岸にトチノキ、ヤナギからなる河畔林が形成されたことが注目される。



5 泥炭質層1(第15層)の上面

図13 地形の変遷(2) 縮尺 1/400

泥炭質層1上（第15層）の上面では比高約1.0 m となる (図13)。この時期には低湿地東北部に高まりがあり、この高まりと斜面の間が北東から南西に流れる流路となっていたであろう。樹木はほとんどなくなった。

以上の変遷から判る重要なことは、地形の変化の大勢は低湿地の埋積による平坦化であるが微地形の変化は複雑な過程を辿るという点である。すなわち、ある時期の凹地や流路は、次の時期には多くの場合、高地に変化し、水流の方向が逆転することも珍しくない。したがって、1 地点における植物遺体の採取だけでは、その組成の変遷が気候等の環境の変化によるもので

あるか、微地形の変化によるものであるかを判定することは難しい。ここに、地形の復原と、複数の地点における資料の採取とが重要である理由があろう。(宇野隆夫)

4 遺 構

下層群には、人為的な施設等の遺構はなく、足跡と小川と立木および倒木がある(図版2～5)。人の足跡は、調査区東北部の斜面の地点で検出した(図版2)。縄文晩期の泥炭質層(第15層)1上上面から踏み込んだものであり、6mの間に12個の足跡が残されている。歩幅は50～60cmである。足跡の大きさは表面で長さ22cm、幅14cm、深さ8cmを測り、底面では長さ22cm、幅10cmと、やや小型である。5本の指を確認でき、第1指が第3指より前に出ることから人間の足跡と判断できる。踏み込んだ直後に出水に見舞われたらしく、足跡には、白砂が埋積していた。このほか、第21層上面と第28層上面で無数の足跡群を検出した(図版3)。これらは、列を確認できず、人の足跡か動物の足跡か区別できないものが多い。なおこの足跡群は、砂層で埋積されたため検出しえたのであり、他の多くの泥炭質土層上にも同様のものがあつた可能性がある。おそらく、これらの足跡群は、水と食料を求めた人々・動物の活動を示すものであろう。

小川は第21層上面で検出した。幅約1.5m、深さ約0.6mを測り、南から北へ蛇行して流れる(図版3-2、図12-4)。河畔に生えるトチノキとあわせて景観復原の重要な資料となるであろう。

立木・倒木は、第15～28層で検出した(図版4・5、図90～94)。なお根が遺存するものを立木、傾斜に直交して倒れたものを倒木と認定した。これら埋没林とみなしうるものは、植生復原のもっとも良好な資料となる。なお、このほか第30～32層に多い斜面に平行して埋積するものは、流木が漂着したものである可能性が高い。(宇野隆夫)

〔注〕

- (1) 泉拓良「京都大学北部構内の地形復原——縄文時代から弥生時代——」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』pp. 43-48, 1978年
- (2) 横山卓雄「京都盆地、その形成過程」『同志社工学会報』第15号, 1974年